

選挙と反乱――

インドネシアの1955年総選挙とイスラム国家建設

山本 博之

京都大学地域研究統合情報センター

1. はじめに――1955年総選挙とイスラム主義勢力

本稿は、マラヤ／シンガポールのムスリムがインドネシアの1955年総選挙とその後の政治過程をどのように捉えたのかについて、イスラム国家の建設に焦点を当てて『カラム』誌上の議論を紹介する。

マレーシア(1963年まではマラヤ連邦)とインドネシアは、歴史的・文化的に共通点を多く持ちながら、それぞれ独自の国家制度を発展させて現在に至っている。両地域は植民地化と脱植民地化において異なる経験を重ね、インドネシアが独立宣言を発した1945年以降には両者の違いが顕著になったが、それぞれが独立を迎えた1950年代になってもなお、両地域を統合してマレー世界に統一されたイスラム国家を樹立するという構想も存在していた。本稿では、マラヤとインドネシアが互いに相手側における国家制度の形成を観察しつつ自分たちの国家制度を構築していた時期を対象に、イスラム国家建設をめぐる議論の一端を明らかにする。『カラム』の発行者であるアフマド・ルトフィ(エドルス)は、1956年にシンガポールでムスリム同胞団(Ikhwan al-Muslimin)が結成された際の中心人物の1人であり、本稿で紹介する議論はムスリム同胞団結成の背景の1つであると考えられる。

1950年代のインドネシアとマラヤは、どちらも植民地統治から議会制民主主義への移行期を迎えていた。インドネシアは1945年に独立宣言を行い、マラヤはそれに12年遅れて1957年に独立を達成したが、以下のように議会制民主主義への移行という点では1950年代半ばに共通点を見ることができる。

インドネシアでは、1955年に独立後初の総選挙が行われ、国民主義政党、イスラム主義政党¹、共産主義政

党などが選挙戦に参加した。イスラム主義政党であるマシュミ党はジャワ島以外の地方を中心に多くの議席を得たが、国民主義政党を中核とする政権が発足し、イスラム国家樹立の可能性は遠ざかった。これに対応して、1956年頃には中央政府による支配を脱して独自の支配圏を打ち立てる「反乱」がインドネシア各地で発生した。1957年に入ると各地の「反乱」の動きは互いに連携し、中央政府に対する全国規模の反乱に発展していった。

他方、マラヤでは、独立を2年後に控えた1955年に連邦参事会の総選挙が行われ、ムスリム住民は主に国民主義政党の統一マレー人国民機構(UMNO)とイスラム主義政党の汎マラヤ・イスラム党(PAS)を通じて選挙に参加した。選挙の結果、UMNOが華人およびインド人の民族別政党と連合して勝利をおさめ、中央政権を掌握した。1957年にマラヤが独立を迎えると、UMNOを中核とする連立政権が中央政府を掌握し、PASはクランタン州およびトレンガヌ州で州政府を掌握したものの、連邦レベルでは野党の地位に留まった。PASは議会制民主主義の枠内での野党となり、この状況は現在に至っても続いている。

このように見ると、1955年の選挙を通じて国民主義政党が政権を掌握し、イスラム主義政党が非主流化されたことは共通しているが、インドネシアのイスラム主義勢力は「反乱」に訴えたのに対し、マラヤのイスラム主義勢力は議会制民主主義の枠組を受け入れて国会における野党勢力となっている。この違いをどのように理解すればよいのか。

この問いに直接答えることは容易でないが、この問いに関連して、マラヤ(シンガポール)のムスリムがインドネシアの政治状況をどのように見ていたのかを理解するため、以下では、『カラム』の記事のうち1955年総選挙の準備期から1957年の戒厳令施行までの時期のインドネシアの政治情勢に関するものを抜き出し、スカルノ大統領に対する受け止め方やイスラム国家の建設に関する考え方の変化を追ってみた

1 本稿では、イスラム国家の樹立を究極的な目標に掲げて、その目標の達成のために活動する勢力をイスラム主義勢力と呼ぶ。また、イスラム主義勢力のうち、イスラム国家樹立の達成のために議会制民主主義の枠内で活動しようとする政党をイスラム主義政党と呼ぶ。

い。なお、参照した記事は附表に示した通りである。

2. 総選挙まで

『カラム』は、インドネシアの各政党のうちイスラム国家樹立を掲げるマシュミ党に早くから好意的な目を向けており、総選挙に先立ってマシュミ党の闘争について紹介する記事を何度か掲載している〔Qalam 1954.1; 1954.2〕。

1955年3月から10月までの総選挙の準備期間²には、マシュミ党が選挙で勝利することでインドネシアにおいてイスラム国家建設が実現することに期待する記事が見られた。

マシュミ党の闘争は、個人の生活、社会、国家においてアッラーの法とイスラムの教えを実現することを目的とし、この目的は総選挙での勝利を通じてのみ達成される〔Qalam 1955.3〕。

マシュミ党は議会制の合法的な手段に基づいて国家をイスラム化する〔Qalam 1955.9〕。

これらに見られるように、選挙を通じて合法的に国家をイスラム化することが想定されていた。そのためもあってか、有権者に対して選挙に積極的に参加するように呼び掛けている。

総選挙の後で犠牲的行為を行うことはできない。そのため、犠牲を払うのならば今こそ犠牲を払うべきであり、闘争するのならば今こそ闘争すべきであり、財を供出するのならば今こそ供出すべきである。総選挙が終わるまで待ってはいならない〔Qalam 1955.9〕。

投票は1955年10月に行われた。広大な国土における投票結果を集計して各党の獲得議席を確定するには何日もかかるため、最終結果が公表されるのを待つあいだ、部分的に得られる情報をもとにイスラム主義諸政党の勝利を論じる記事が掲載された。この総選挙には多くの政党が参加したが、多数の得票を得たのは上位4つの政党であり、マシュミ党はその1つだった。

10月15日付の Abadi誌によれば、インドネシアのイスラム・ウンマ (umat Islam di Indonesia) は全インドネシアの15地区のうち13地区で第一党になった。マシュミ党が11地区、ナフダトゥル・ウラマー (NU) が2地区、そ

して国民党が2地区である〔Qalam 1955.11 (64)〕。

これら (諸政党) のうち得票数が多かったのは、マシュミ党の768万3738票、国民党の780万2995票、NUの659万888票、共産党の604万4597票だった。国民党の得票数はマシュミ党より多いが、マシュミ党はジャワ島で負けたもののジャワ島以外では勝っており、ジャワ島とジャワ島以外での議席の配分方法との関連でマシュミ党が国民党より多く議席を獲得することは明らかである〔Qalam 1955.11 (64)〕。

その上で、国民党が共産党との協力からイスラム主義諸政党との協力に方針を転換することへの期待を表明している。

この (イスラム主義諸政党の) 勝利に加え、シディック・ジョヨスカルト (国民党総裁) を失ったことから、国民党は共産党との協力からイスラム主義諸政党との協力に方針を転換する可能性がある。今後の情勢を見守ろう〔Qalam 1955.11 (64)〕。

3. 総選挙直後

総選挙の結果が判明してから組閣までの期間について、以下では、エドルス (Edrus) 名義の記事 (1955年12月から1956年11月まで) と「我々の特派員」(wakil khas kita) 名義の記事 (1957年1月から1957年3月まで) をそれぞれ発表順に見ていきたい。

(1) エドルス名義 (1955.12～1956.11)

エドルスは、総選挙で勝利した4つの政党のうち共産党の躍進を特に警戒する。

四大政党の勝利のうち大きな関心を集めているのは共産党の勝利である。共産党の勝利によって、次のことが多くの人々に——特にインドネシアのウンマ (umat Indonesia) に——明らかになった。共産党が現在第四党の地位を得られるということは、やがて第一党にもなりうるということである。そして、もし共産党が第一党になれば、権力は共産党に集中し、尊い民主主義は確実に終焉を迎えることになる。共産党が政権を握る全ての土地で見られるように、共産党以外に権力をもつ政党は一切存在しなくなる〔Qalam 1955.12 (65)〕。

その上で、共産党を明確に排除しようとしないうるスカルノに対して、直接的な批判は行っていないものの、「独裁者」という表現を用いることで不快感を表明している。

〔スカルノ大統領は〕演説において、議会制における大統領であることを堅持すると常々主張してきた。それは、大統領を国家の長とし、ウンマへの責任は首相を長とす

2 この時期にはマラヤおよびシンガポールでも総選挙が行われた。シンガポールでは1955年4月に立法参事会選挙が行われ、デビッド・マーシャル率いる労働戦線が第一党になった。マラヤでは1955年7月に立法参事会選挙が行われ、国民主義政党の連合体である UMNO-MCA-MICの連盟が圧勝した。

る内閣の手に置かれるという制度である。大統領ではなく首相とその閣僚こそがウンマの安寧に対して責任を負う制度であり、この種の統治制度において、大統領は、発言であれ行動であれ、好き勝手に行うことが許されず、統治を行う内閣の承認を事前に得なければならない。そうでなければ、つまり、もし大統領が好き勝手に振る舞えるのだとしたら、それはもはや大統領ではなく独裁者としての性格を持っていることになる[Qalam 1956.1]。

この議論で興味深いのは、スカルノ大統領の「責任」を問題にしている点である。選挙によって選ばれた指導者は選挙に参加した人々に対して責任を負うのであり、ここではそれがウンマに対する責任として語られている。

(スカルノ大統領は) 公衆の前では、独裁者としての振る舞いや特定の政党に肩入れした態度を見せることはないが、公衆に対して行った発言の責任を取らないため、実際の行動においてはその逆である。

内閣が責任を負うという現行の統治制度においては、公衆の前で行われる大統領の発言は全て内閣が事前に知っていなければならない。しかし、スカルノ大統領が行ったのは何だろうか？ 常に自分の思いのままに発言し、その発言によっていかなる結果が生じるかを考えたことがない[Qalam 1956.1]。

1956年3月までに総選挙の結果が公表され、マシュミ党を含む4大政党が主要政党となった。インドネシア国民党(PNI)のアリを首班とする内閣が成立し、インドネシア共産党(PKI)からは入閣がなかった。

マシュミ党を排除して連立政権を作ろうとする動きに対し、マシュミ党はジャワ以外の地域で強い支持基盤を持ち、したがってマシュミ党を組閣から排除しないようにと訴えている。

現在のマシュミ党の立場は以前と異なる。マシュミ党はジャワ島以外で最も多くの議席を獲得しているため、マシュミ党が排除されれば地方間問題が生じる。マシュミ党抜きの内閣では、ジャワ島の代表だけの内閣と見なされかねない。このことはインドネシアのウンマの安寧と一体性に対して重大な危機をもたらすものである。組閣にあたっては決してマシュミ党を排除してはならない[Qalam 1956.4]。

これと同時に、4年後に行われる次の総選挙でムスリム有権者が他の政党に投票することのないよう、イスラム系政党に総選挙への準備を促している。この時点においてもイスラム国家の樹立は選挙を通じて実施することが想定されている。

この内閣に(次の総選挙までの)4年間で与えられるのであれば、イスラム諸政党は、(次の総選挙で)ウンマが他の

政党の虚言や造言に惑わされることのないように組織をさらに浸透させていくことが望まれる[Qalam 1956.4]。

(2)「我々の特派員」名義(1957.1～1957.3)

1956年7月には国会議員の互選による制憲議会選挙の結果が発表され、ほとんどの議席を四大政党が占めた。この後、10月にはスカルノが国家統一のために政党を解体すると提唱し、12月にはスマトラ出身のハッタが副大統領を辞任した。同じ頃、12月から翌月にかけてスマトラ各地で自治政権が樹立された。

このような状況でエドルス名義の記事を受け継いだのが「我々の特派員」(wakil khas kita)である。「我々の特派員」は、まずインドネシアの中央政府が事実上ジャワ人の政権であること、したがってジャワの新植民地主義の側面があることに目を向ける。

現在のアリ・サストロアミジョヨ政権は、インドネシア共産党の強い支持を受けていたかつてのアリ＝アリフィン内閣の性格を継続するためにスカルノ大統領が求めたものである。これこそが、ジャワ島出身の指導者によって支配される内閣を作ろうとしてスカルノ大統領が求めたものののだ[Qalam 1957.2]。

この新しい状況の中で、現在の内閣を解散してハッタを首班とする内閣に替えるよう求める声が地方から上がっている。一部の指導者だけでなく民衆が繁栄するように、そして、ジャワ島から各地方への新たな植民地支配を生み出さないように[Qalam 1957.2]。

ちょうどこの頃にあたる1957年1月、マシュミ党はハッタを首班とする内閣の組閣を求めて全閣僚を引き揚げていた。同月、中央スマトラでインドネシア共和国政府からの独立の動きがあることを紹介した『カラム』の記事の中で、選挙を通じてイスラム国家の建設を求めるだけでは不十分であるとの主張が見られるようになった。

インドネシア共和国政府は、先の総選挙において、全ての民衆に対し、自分の見解を表明し、票を投じる機会を与えた。しかしイスラム・ウンマは、イスラムの政権を樹立する上で総選挙(投票)が唯一の方法ではなく、さまざまな道から攻めることができることを知っている。それらの方法の1つが、総選挙でウラマーを活性化させるイジュティハードである。それは、総選挙がイスラムの法と政権を樹立するために取りうる1つの道だからである[Qalam 1957.1]。

また、犠牲となるのは民衆であり、同じ民族どうしの戦いであるとされている。

その後スカルノは、カハル・ムザカル、トゥンク・ダウド・

ブルエ、カルト・スウィルヨらが社会に帰還しなければ「大砲が物を言う」だろうと表明した。これに、かねてより「武力には武力で返す」と表明していたサストロ・アミジョヨ首相の「事態を深刻にするだけなので交渉は望まない」という発言が続いた。その結果、激しい戦闘が生じた。スカルノが望んだ「大砲が物を言う」が実践される中でバタック諸族(suku2 Batak)とパダン族(suku Padang)によって攻撃目標とされたのは、他でもない一般民衆であった [Qalam 1957.1]。

ここでいう「民族」とはバンサ(bangsa)であり、それはインドネシア民族を指す。バタック諸族やパダン族³はバンサではなくスク(suku)とされている。スクとはスク・バンサ(suku bangsa)を略した表現であり、「バンサの一部」すなわち「バンサの支族」という意味を持つ。したがって、インドネシア国内の人間集団に対しては、バンサで呼ばれるのはインドネシア民族全体であり、スク(バンサ)で呼ばれるのがその部分集合である各集団ということになる。

このことを踏まえた上で、興味深いのは、アチェにおける対立に関連して、アチェの人々をバンサで表現していることである。同じ文中に「インドネシア民族が自民族に対して残虐行為を行う」とあることから、アチェ人もインドネシア民族に含まれているという認識がうかがえる。その一方で、アチェの人々を独自のバンサと見なしたくなる要素があるのかもしれない。

この状況において、インドネシアの諸族(suku2 bangsa Indonesia)とアチェ諸族(suku2 bangsa Aceh)の間に戦闘が発生した。バタック族の兵士が派遣され、かつてファシストのドイツと日本によってなされたよりもひどい残酷な行為が行われた。……これが、インドネシア民族(bangsa Indonesia)自身によってアチェのウンマ(umat Aceh)に向けられた「大砲が物を言う」の実態なのだ。……インドネシア民族が自民族に対して残虐行為を行うという点で、その恐ろしさは何倍にも増している [Qalam 1957.3]。

4. 戒厳令布告後(1957.4~1958.5)

(1)「独裁者」スカルノ

1957年2月、スカルノは挙国一致内閣と国民協議会を柱とする構想を打ち出した。3月にはスラウェシとカリマンタンで自治政権が成立し、同月、スカルノ大統領は全国に戒厳令を布告した。

『カラム』では、1957年3月号まで「スカルノが大統

領になればインドネシアは崩壊する?」というコラムが掲載されていた。戒厳令が敷かれた翌月の号から、このコラム名から末尾の疑問符がなくなり、「スカルノが大統領になればインドネシアは崩壊する」となった。このことは、インドネシアの崩壊がもはや杞憂ではなくなったことを示している。

この時期に見られる大きな特徴は、スカルノに対して「独裁者」という表現が使われていることである。「スカルノは独裁者として成功するだろうか」という記事では、スカルノを独裁者と呼んではいけないものの、それにかなり近い印象を与える表現となっている。

スカルノ大統領は、自らの願望と欲望を実現するため、ついにインドネシア全域において戦争状態と戒厳令を布告した。それは、独裁者の性格をもって全インドネシアを支配したいという「構想」を実現するためである [Qalam 1957.4]。

スカルノ大統領は、明らかにインドネシアにおいてプロレタリア独裁を打ち立てようとしている。その意味するところは、民主主義が終焉を迎え、スカルノが自分の思うままにインドネシアを支配するということだ [Qalam 1957.4]。

スカルノは独裁者として成功するだろうか。インドネシアで戒厳令を維持するための軍勢力は十分だろうか。……我々が見積るところによれば、ダルル・イスラムは十分な強さを備えているが、インドネシア国軍の強さには限度がある。……ダルル・イスラムに対峙するだけでも強さが足りないのに、マシュミ党とNUが揃って「大統領を辞任せよ、我々はイスラム国家の樹立を求める、さなければインドネシアの大地に血が流れることは明らかだ」とスカルノに最後通告を与えたのであればなおさらのことだ。流血は避けられないかもしれないが、インドネシアでイスラム国が実現することを私は確信している [Qalam 1957.4]。

スカルノの指導性に対する批判は、スカルノのイスラム性の扱いに対する疑念という形で提示された。インドネシア共和国の暫定憲法にインドネシアの大統領はイスラム教徒でなければならないと規定されていることを持ち出し、スカルノはイスラム教徒なのか、それとも背教徒なのかと問いかけた。言うまでもなく、ここで問われているのはスカルノが内面的にイスラム教徒であるかどうかではなく、イスラム教徒の利益のための統治を行っているかどうかという点である。

国外にいる我々は、そういった状況を耳にするたびに、「憲法に照らしてスカルノはインドネシアの大統領になる資格があるのか」という疑問を持つ。(インドネシア共

3 パダン市を州都とする西スマトラ州の多数派であるミナンカバウ人を指す。

和国の暫定憲法は、インドネシアの大統領はイスラム教徒でなければならないと規定している。) スカルノ大統領は確かにイスラム教徒なのか、それとも背教徒(murtad)なのか[Qalam 1957.4]。

もしスカルノが真に愛国者であるのなら、ムハンマド・ハッタが副大統領職を辞任したときにスカルノもそれに倣うべきだった。インドネシアの統治のあり方を決める総選挙が済んだ以上、自分のすべきことはもう終わった、とハッタは語った。そのためハッタは辞職し、職を続ける場合は改めて任命されることを望んだのである。大統領職についても同様であり、総選挙が終わったことでインドネシアの暫定大統領はすでに役を終えている。しかし、スカルノはその地位を手放すのがとても惜しいようだ。大統領になったことで、スカルノは無制限に望むままに振る舞っている。そのことは、外部の目に、特にマラヤの我々の目にはっきりと見える[Qalam 1957.4]。

また、地方性も問題にされている。総選挙で勝利した四大政党のうち NU と国民党が結んで政権を構成していることにに対し、これはジャワ人だけの政権であると批判する。

NU と国民党が与党になるということは、その政権がジャワ人だけの政権になるということだ。なぜなら、NU と国民党の議席は90%以上がジャワ島選出の議席だからだ[Qalam 1957.4]。

ジャワによる支配に対する異議申し立ては、スマトラとマラヤの合併案という形で表明される。『カラム』の表紙にしばしばアチェ人指導者の写真が掲載されたことに示されているように、『カラム』はスマトラ島、特にアチェの政治指導者と密接な関係があった。「スマトラから聞こえてきた」というのがスマトラのどこから「聞こえてきた」話であり、それがどれだけ具体的な構想であったかは明らかでないが、この構想を紹介する意図がジャワによる支配への抵抗にあったことは明らかである。

スカルノの「構想」と独裁的な手法を目にして、スマトラがマラヤと合併し、ボルネオ(カリマンタン) が英領北ボルネオ、サラワク、ブルネイと合併し、スラウェシがミンダナオと合併する、という主張がスマトラから聞こえてきたのも驚くほどのことではない[Qalam 1957.4]。

(2)戦いによるイスラム国家建設

総選挙前には、選挙でイスラム教徒の代表を選出することを通じてイスラム国家の樹立が実現できると考えていたが、選挙の結果として大統領となったスカルノにはイスラム国家化の意思がないことが明らかになった。これに関して、イスラム国家の樹立の方法はイスラム教徒が置かれた状況によるとの考え

方を示している。

イスラム・ウンマが住むところではどこでも、イスラム国家の建設が義務である。その方法とあり方は、それぞれの能力と努力によって決まる[Qalam 1957.4]。

これに呼応して、その翌月号では、選挙ではなく戦闘によるイスラム国家建設を呼びかけるようになる。

ひとたびスカルノ大統領が統治の最高権力を握り、インドネシアのウンマの代表となれば、インドネシアにおいてイスラム国家が存立し得ない、ということが明らかになった。イスラム・ウンマがこれ以上スカルノと「和平」の道を探ろうとすれば、その「和平」の1つ1つがインドネシアにおけるイスラム国家建設の理想の瓦解を招くことになる[Qalam 1957.5]。

危機が間近に迫り、敵がより強大になった今、ムジャヒードたちに加わるときが来た。彼らは、インドネシアにおいてイスラム国家を樹立するという目的のために、早くから赤い血を流し、生活の快適さを棄てた人々である。地位や生活の快適さを求めるためではなく、ただ神の呼び声に応えるため、神の指示に従うために自らの赤い血を流した人々である。彼らの流した血は決して無駄ではなく、神によってそれに応じた褒美が与えられる。イスラム・ウンマは、現在の状況を見ても、インドネシアにおいてジハードを為すべき時が来たと世界に知らせるべき時が来たと思わないのか。インドネシアにおけるイスラム国家の建設を赤い血によって洗い清める時が来たと思わないのか[Qalam 1957.5]。

これ以降、『カラム』はスカルノに対する批判を強めていく。1957年7月号では、スカルノを明示的に独裁者であるとしている。

スカルノの構想に基づく国民協議会の設立によってインドネシアは独裁国になった[Qalam 1957.7]。

これ(批判者の逮捕)は、スカルノが独裁権力によって全インドネシアを支配しやすくするために、スカルノの欲望の妨げになる人々を取り除くことに他ならない[Qalam 1957.7]。

さらに、スカルノを長とするインドネシア政府をムスリムの「敵」と呼ぶに至っている。

イスラム国家の建設を嫌うスカルノ自身を長とする敵たちに直面する中でインドネシアのイスラム・ウンマが置かれている地位を検討したい[Qalam 1957.8]。

このような状況では合法的な手段を通じたイスラム国家建設は無理であると結論付け、インドネシア各地で行われている「反乱」に参加するようイスラム教徒たちに呼びかけている。

附表 『カラム』参照記事一覧

1955年3月(56号)	「共産主義者と異教徒」(Komunist Fahaman Kafir)
1955年9月(62号)	「インドネシアのムスリムの闘争の周縁で」(Di Sekeliling Perjuangan Muslimin Indonesia)
1955年10月(63号)	「インドネシアのムスリムの闘争の周縁で」(Di Sekeliling Perjuangan Muslimin Indonesia)
1955年11月(64号)	「インドネシアのイスラム・ウンマは総選挙で成功した」(Umat Islam Indonesia Berjaya dalam Pemilihan Umum)
1955年12月(65号)	「共産主義者の勝利はインドネシアの民主主義を危くする」(Kemenangan Komunis Membahayakan Demokrasi di Indonesia)
1956年1月(66号)	「インドネシアのイスラムの状況と地位」(Hal Ehwal dan Kedudukan Islam di Indonesia)
1956年4月(69号)	「インドネシアのイスラムの状況と地位」(Hal Ehwal dan Kedudukan Islam di Indonesia)
1957年1月(78号)	「スカルノが大統領になるとインドネシアは崩壊する？」(Selagi Sukarno Menjadi President, Indonesia akan Hancur?)
1957年2月(79号)	「スカルノが大統領になるとインドネシアは崩壊する？」(Selagi Sukarno Menjadi President, Indonesia akan Hancur?)
1957年3月(80号)	「スカルノが大統領になるとインドネシアは崩壊する？」(Selagi Sukarno Menjadi President, Indonesia akan Hancur?)
1957年4月(81号)	「スカルノが大統領になるとインドネシアは崩壊する」(Selagi Sukarno Menjadi President, Indonesia akan Hancur)
1957年5月(82号)	「スカルノとその概念」(Sukarno dan Konsepsinya)
1957年6月(83号)	「スカルノはイスラム・ウンマを分裂させる」(Sukarno Memecah-belahkan Umat Islam)
1957年7月(84号)	「スカルノが大統領になるとインドネシアは崩壊する」(Selagi Sukarno Menjadi President, Indonesia akan Hancur)
1957年8月(85号)	「スカルノが大統領になるとインドネシアは崩壊する」(Selagi Sukarno Menjadi President, Indonesia akan Hancur)
1957年9月(86号)	「スカルノが大統領になるとインドネシアは崩壊する？」(Selagi Sukarno Menjadi President, Indonesia akan Hancur?)
1957年10月(87号)	「インドネシアの崩壊についてのことがら」(Hal Ehwal yang mengenai Kehancuran Indonesia)
1958年1月(90号)	「スカルノが統治するとインドネシアは崩壊する？」(Selagi Sukarno Memerintah, Indonesia akan Hancur?)
1958年2月(91号)	「スカルノが統治するとインドネシア国家は崩壊する？」(Selagi Sukarno Memerintah, Negara Indonesia akan Hancur?)
1958年3月(92号)	「スカルノが統治するとインドネシア国家は崩壊する？」(Selagi Sukarno Memerintah, Negara Indonesia akan Hancur?)
1958年4月(93号)	「スカルノが統治するとインドネシア国家は崩壊する？」(Selagi Sukarno Memerintah, Negara Indonesia akan Hancur?)
1958年5月(94号)	「スカルノが統治するとインドネシア国家は崩壊する？」(Selagi Sukarno Memerintah, Negara Indonesia akan Hancur?)

大統領が自ら共産主義者と協力し、イスラム教の大敵である共産主義者がイスラム・ウンマへの抑圧を日に日に強め、その結果としてイスラム・ウンマが日に日に弱体化させられている現状において、この〔イスラム国家の樹立〕願望を合法的な闘争によって実現することは期待できない〔Qalam 1957.8〕。

スカルノとその支持者である共産主義者は、今やすでに明らかに、イスラム教徒たちが教えに背き、アッラーの法を実践する義務があるという信仰から脱することを求めている。そのため、西ジャワ、スラウェシ、アチエでダルル・イスラムの樹立のためにイスラムの兵士たちによってなされている闘争にインドネシアのイスラム・ウンマが参加する時が来たのだ〔Qalam 1957.8〕。

なお、それにもかかわらず、インドネシアの人々を1つの民族に属する人々であると捉えていたことは確認しておきたい。インドネシアにおける「反乱」は、民族自決に基づく独立運動ではなく、1つの民族内におけるイスラム国家樹立という国家体制のあり方を巡る戦いと位置づけられている。

疑いをかけられた人々がインドネシア国軍によって与えられた暴行についての知らせが入った。肉を削いだり村全体をまとめて射殺したりするなど、現代ではこれまでの民族も自民族に対して行ったことのないような行為であった〔Qalam 1957.9〕。

1957年8月というマラヤ連邦の独立の時期に書かれたこれらの記事が、マラヤの情勢を念頭において

書かれていたことは疑いようがない。独立直後に書かれた1957年10月号では、マラヤの住民はインドネシアの経験から学ぶべきだと唱えている。

独立したばかりのマラヤの住民は、民衆の安寧ではなく指導者の個人的な感情と欲求に基づき、そのため指導者や有力者の生活が民衆の生活と比べてまるで天と地であるような統治のあり方のために引き起こされたことから教訓を得るべきだ〔Qalam 1957.10〕。

ここでは直接的な表現を避けているが、もしマラヤの政治指導者たちが民衆と遊離した統治を行うようであれば、マラヤにおいても「反乱」が起こるかもしれないという警告であるとも受け取れる。

飢餓のためにインドネシアで蜂起が起こることがあるだろうか。インドネシアに新しい政権が現われなければ、それは確実に、しかもあまり遠くない時期に起るはずだ〔Qalam 1958.1〕。

という一文も、インドネシアの情勢を分析していると同時に、マラヤにおいても蜂起がおこる可能性があることを国家指導者に伝えていると読むことも可能だろう。

5. おわりに

これまでに見てきたことを簡単にまとめると以下

のようになる。

第一に、多数決原理に基づく民主主義に対する構想の違いである。選挙を通じて共産党が勢力を浸透させることに対する警戒感と、多数派であるジャワによる支配への批判は、単純な多数決を導入した場合に適切な政治体制が得られないかもしれないという考え方につながる。この考え方は、同じころマラヤで形作られていた民族別政党の連合体による統治というあり方とも繋がるものとなっている。

第二に、イスラム国家建設の手段に関する認識の変化である。総選挙の前にはイスラム国家は選挙を通じてのみ実現しようとしていたが、選挙の結果として選ばれた政権のもとでイスラム国家建設が行えないとわかると、イスラム国家建設の方法はそれぞれであると認識を転換し、さらには戦いと流血によってイスラム国家の建設を求めるべきだと唱えるに至った。

第三に、政治指導者の責任に関する認識の変化である。「責任」(tanggungjawab)とは意思決定の権限を持つ存在の決定に従うことであると考えれば、スカルノがインドネシアのウンマに対して責任を負っているという主張は、「神への責任」から「ウンマへの責任」へという転換が見られたということを示している。

本稿の冒頭でも触れたように、これらの変化の過程はシンガポールでムスリム同胞団が結成された時期と重なっており、今後『カラム』をさらに読み進めていくことでムスリム同胞団の活動の様子が明らかになっていくものと思われる。なお、本稿で紹介した『カラム』の記事からは、『カラム』とスマトラ(特にアチェ)の政治運動のあいだに深い関わりがあった様子がうかがえる。『カラム』の記事を読み進めていく上ではこの点にも注意を向けていきたい。